

学校の地域学習にかかわる大人の生活主体への学び ：小値賀町「かーちゃんの会」に焦点をあてて

岡, 幸江
九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門 : 教授

<https://doi.org/10.15017/4480697>

出版情報 : 社会教育研究紀要. 3, pp.41-50, 2021-03-31. Faculty of Human-Environment Studies,
Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

学校の地域学習にかかわる大人の生活主体への学び

—小値賀町「かーちゃんの会」に焦点をあてて—

A study on Learning to independent citizens by people involved in school community learning

— Focusing on “Ka-chan no Kai (mother’s group)” in Ojika-cho —

岡 幸江^{*}
Oka Sachie

1 課題と方法

本稿の目的は、長崎県立北松西高校の生徒らへ筆者らが行った第一次調査から第二次調査に至るキャリア意識の「変化」の背景を、支える大人の変化の側面から探ることにある。地域の側の変化に焦点をあてることを通して、学校でとりくまれる地域学習を、地域の生活当事者たちとともに築かれる共同的な学習として描き出すことを試みるものでもある。

本特集溝内論文はわれわれが目にする「変化」に迫るにあたり、北松西高校の授業科目「地域探究」に即して分析を行っている。その視座は、本授業が高校生の多面的な「表現を促す」ものとして作用したのではないかというところにある。一方本稿は、支援する大人が「生活主体への学び」を生成しており、高校生の変化を間接的に支えていたのではないかという視座にたつ。

大人・支援者の側に焦点をあてる理由には、2016年の第一次調査時、小値賀島の高校生たちの進路意識のある種のいびつさを目の当たりにしたことも関係している。高校生たちの声からは、「〇〇さんは引き戻されて島に戻った」「△△さんは（島外の）どどこで活躍している」といった地域の人たちの言葉を、彼らが敏感にうけとめている様子が明らかであった。家族などの理由がなければ島に戻れない、活躍するのはすなわち島外での活躍を意味するという価値観が、無意識のうちに地域で共有されているように思われた。調査チームはここに、地域社会や大人たちの意識が若者にもたらす影響の大きさについて、改めて考えさせられることとなった¹⁾。

これらは、島に生きる人々の、自らの地域で生きていくことをめぐる価値づけにかかわることであろう。別稿で筆者は、地域学習を「地域における多様な価値とその中での価値葛藤の存在を前提とし、人々と地域の価値意識をともに組み換え再創造していく学習」とおき、考察を試みたことがある²⁾。これは、地域学習を、学校における子どもの学びにとどまらない、社会教育を含む地域全体の課題ととらえるものである。ただし本論はそれを、社会教育事業の展開においてではなく、島の大人たちが島の現実に向き合いながら生活主体として学びを深めていく様子を描き出すこと、そして地域学習の生成における彼らの位置を探ることから、課題に迫ることを試みたい。地域学習がそうした、子どもと大人の相互的な学びにおいて持続的なプロセスをもって定着していくとき、地域の価値を否定する方向へ働くグローバルな社会構造にも対峙しうる、地域の持続可能性がみえてくるのではないだろうか。

^{*}九州大学大学院人間環境学研究院

本稿は具体的には、小値賀町小中高一貫教育の総合学習を地域から支える、島の食育団体「かーちゃんの会」に注目し、二人のキーパーソンの生活者としての学びに迫ることとする。

2 異なる文化との出会いを支える環境 ―生活主体への学びと地域に迫る視点

(1) 広域化する暮らしの「多様性」とそれらとの葛藤関係をもとに再創造される地域

まず「生活主体への学び」をみていく視点について、確認していきたい。その際本論は、地域変動下の「地域」への問題意識と関連づけながら、生活主体への学びをみる視点を検討してみたい。

今回の第2次小値賀調査の前提にあたる、本紀要第2号特集「九州における地域変動と社会教育」では、「地域」が、国からは生活関連サービスの維持、経済界からは生活・労働・消費行動の市場化、など目的は違えども、既存の自治体や自治体が定めた地域圏域を超えるものとして構想されつつあることを確認した。共同研究はまず、現在の人々の生活様式・生活意識をふまえ、既存の自治体事業が想定する地域圏域を超えた「地域」像を見出していく必要を認める立場にたつ。しかしそのうえで、外圧的かつ一律的基準で多極構造化されたブロック圏としてではなく、人々の暮らしの行動様式および地域意識が、広域―狭域を行き来しながらも自治的に育まれる可能性を持つ一定の圏域＝「リージョン」として、地域をとらえる可能性に迫ろうとしていた³⁾。

共同研究におけるこの地域変動下の地域像の模索はまだ道半ばといわざるをえないが、少なくとも、社会教育学が、市町村自治体圏域や自治体が定めた校区などの小地域圏域だけを社会教育実践の基盤としての地域を考えることの問題性を提起する試みではあった。この提起は、2020年のコロナ・パンデミック以降、さらに問題を複雑化させる形で一層具現化されたように思われる。緊急事態下のwebコミュニケーションと家族単位に依存せざるをえない暮らし・仕事・学業に象徴されるように、暮らしを支える基盤となる単位を自治体&小地域におくという構図自体が、さらにゆらいでいると思われるためである。行政施策が必ずしもタイムリーで即応的な危機対応ができない場合、個人・家族の自助力やさまざまなアクターによる共同力・協同力のいかに、生活危機を乗り越りうるかどうかが左右されてしまっている。今後幾度かの波を超えて緊急事態が収束しながら向かう先は、暮らしと地域の関係に関しても、ニューノーマルであっても、もはや以前の様式ではないだろう。

ひとりひとりの暮らしの状況が、居住するエリアだけでなく個人や家族のレディネスや生活基盤によっても左右され、その多様性によって格差や困窮状況の拡がりや余儀なくされる以上、その状況への即自的な公的対処は不可欠である。しかし社会教育の特性をもって一層考えることは、個人や家族をこえたレベルで自律的・協働的な解決を支える基盤づくりをもって、中長期的に事態を乗り越えていく道筋ではないか。そこで探究されるべきは、一律の方針によって運用される地域像ではなく、暮らしの現状の「多様性」を意識的に受け止め丁寧に交わし合う学びの中で築かれる、包摂性を支えに運営される地域像ではないだろうか。

一律性・均質性においてとらえられがちな圏域としての地域を、多様性という観点から検討する議論は、コロナ禍以降にはじまったものではない。たとえば川端・安藤ら(2018)は、グローバル経済が価値づけされたローカルイメージを包摂していくことを指摘し、地域の多様性を描き出すことの必要を論じている。ここで注目したいのは、地域の「多様性」は、容易に一元的価値によって選別され、目に見えにくい形で“サイレント・マジョリティ”化されかねないと指摘されていることである。均質化に対抗する固有性が地域でたちあげられるとき、それはグローバルな社会へ情報発信可能なデータへと変換されるのだという。「この変換によって、地域社会は本質主義的に理解され、デジタル化され、グローバルに消費可能な地域イメージとしての場を獲得し、共有可能なものとなる。ただしこのようなローカルイメージの前景

化は、多数のローカルなものを後景化することによって成立している⁴⁾

ここで川端らが指摘するのは、グローバル社会と一定圏域の地域の「多様性」との間の緊張関係であるが、その打開へのまなざしは、後景化する中におかれる生活者たちの声の多様性をいかに描き出しようかにむけられている⁵⁾。これを、グローバルな社会と地域との緊張関係を、地域内の地域イメージと「多数のローカルなもの」との緊張関係も含めてとらえ直す必要を示すものと、本稿は受け止めたい。

ただ、ここで川端らの主たる関心は、既存の地域社会学が地域活性化のモデルやそれをけん引する人物の優良事例を描き出すもののサイレントな多様性が浮かび上がらない状況に対して、地域内の「沈黙」の文脈と実態にいかにもアプローチするかにむけられている。本稿の地域像へのアプローチからいえば、「多数のローカルなもの」がおのおのの暮らしの文脈に沿うかたちで声をあげ、地域内の緊張関係をのりこえながら、オルタナティブなローカルイメージを再創造し続け、外部にも発信してゆく自律的なプロセスを描き出すことを、検討課題とする。また、主体が自らの声や葛藤に向き合うことを支える条件に目を向けることもあわせて必要だろう。

(2) 生活文化を介して日常を再発見し自らの価値観を再構築する生活主体像

こうして、本稿は「生活主体への学び」を、日常に埋もれた自らと周囲の声を、関わり合いの深まりの中で自覚化しつつ、暮らしへの価値観を再構築していく学びとおいたうえで、上記の課題に以下のような方策で迫ってみたい。

第一に本論は、「おのおのの暮らしの文脈」と「多様な価値意識や行動様式」の関係が浮き彫りとなり、また交じりあう可能性をもつものとして、具体的な〈暮らしの文化〉を媒介項に位置づける。文化は地域ごとに共通性を持つ場合が多いが、とくに暮らしの文化については、一方で家々によって異なる様式を持つ場合が少なくない。この多様性を、暮らしの文化のもつひとつの可能性の拠り所と位置付ける。本稿はとくに「食文化」に注目するが、それは地域ごとの共通性と個別性の接点に位置づく、ひとつの典型的な暮らしの文化であろう。

第二に、その暮らしの文化は、なんらかの身近なコミュニケーションを生み出す装置となっている場合が少なくない。食の場合も、「共食」や「孤食」という言葉もあるが、コミュニケーション自体がその文化に深くねざしている。食べることを介すること自体が、コミュニケーションへの新たな可能性をひらく場合もある。ここでは、食文化への関与から生まれるコミュニケーションがどう作用しえたのかに注目してみたい。

第三に、すでにみてきたように、地域の価値がグローバルで一元的な価値に吸収・変換される可能性を念頭に、個人がそれぞれのありようで異文化と出会い、異文化への認識と自らの足場への再認識を通して、日常を新たな目で再発見していく点に注目する。それは個人が内なる葛藤も伴いつつ異なる文化への気づき・出会いに基づき、自らの価値意識を創造していくプロセスである。自分とは異なる人生を介し、それに付随する文化や社会に出会い続けるプロセスは、社会に消費される一元的な地域の価値とは異なり、多様性を維持しながら地域の価値世界を生み出していくことになるのではないだろうか。

そのため以下、島の日常感覚との「ずれ」を支える個々人の生活背景と歩み、異なる文化との出会いと気づきを支える場、そして新たな文化との出会いが島の構造的な問題の気づきにつながりえているか、に注目しながら、島を生きる二人が、食文化にかかわってたどった歩みに注目してみたい。

3 地域の側の活動の展開と認識の変化

(1) 「かーちゃんの会」(ふるさとの味・かーちゃんの味つたえよ一会)とは

通称「かーちゃんの会」は、2004年、小値賀町の婦人連絡協議会・農協女性部・漁協女性部・商工会女性部・食生活改善推進員・農産物直売所「あい菜市」の6団体を中心に、「地産地消」や「食育」推進のために発足した組織である⁶⁾。なお2004年は、佐世保市との合併にかかわる住民投票が実施され、52票の僅差で非合併を選択した、小値賀町にとって重要な年でもある。

当時役場産業振興課の職員として「かーちゃんの会」の発足を企画し支えた永田敬三さんは、食をキーワードに地域を1つにまとめること、その際女性の力を重んじることを目的としていたと語る。背景には、非合併を選択した小値賀町の自立推進計画の産業振興において、地産地消推進がカギにおかれていたこともあったという。ただし、「かーちゃんの会」は当初、地域の主だった女性6団体の推薦委員による組織として発足した。委員にとって推薦元団体の活動が主である以上、「かーちゃんの会」が自律的に動くには難しさをかかえていた。自走段階に至ったのは、のちに設けられた「応援隊」枠という手上げ方式で入ったメンバーが生き生きと動きはじめた発足3年後からのことである。そのキーパーソンが「応援隊」として加入し、現在代表をつとめる浦いせ子さんである⁷⁾。

以下、浦さんおよび会の若手メンバーでIターン者の博多屋美乃里さんの学びを、インタビューをもとにたどる。博多屋さんは「かーちゃんの会」にとってはニューフェイスだが、加入まもなくして多様な参加層を惹きつける「しばつけ団子の会」を企画・成功させ、浦さんらを驚かせた人物でもある。

(2) 島の日常を再発見する、それぞれの「目」

①野崎島から小値賀島の生活文化を観て

浦さんは、小値賀町が抱える17の島のなかでも比較的大きな島、野崎島の出身である。町総務課資料「集落別人口増減の推移」によれば、1960年には野崎島に120世帯645人の住民が居住していた。しかし戦後社会の転換の中で、自給自足の島にも現金収入が必要となり、多くの島人が出稼ぎに出た果てに、島民全員が離島を決断することになった。2001年には最後の住民であった島の宮司が離島し、その後は島の体験型宿泊施設の管理人一人だけのほぼ無人の島となった。現在は2018年に世界文化遺産に登録された、野崎島の集落跡や

その構成資産である旧野首教会、そして豊かな自然の魅力もあって、野崎島は多くの観光客が来島するスポットとなっている。浦さんはこうした、いまはなき、自給自足的な生活が営まれる野崎島のもとで育った。

私は、母が結構していたので、興味はあったんです。母がするのを見てるし、それなりのことが、自分ではできているつもりでいました。

自分でつくっていたんですね。野崎だからなおさら。買いに行くにもいけない。自分で作らなくちゃしょうがないという生活をしてきました。できるだけ自分の手で、素材を使ってつくろうという思いもどこかにありました⁸⁾。

そうして育った彼女は、本島・小値賀島に嫁いで隣島の食文化にふれ、興味を抱く。島では固有の生活文化が維持されやすい。そのため、島から島へという生活環境の変化が浦さんの「目」にもたらしたもの

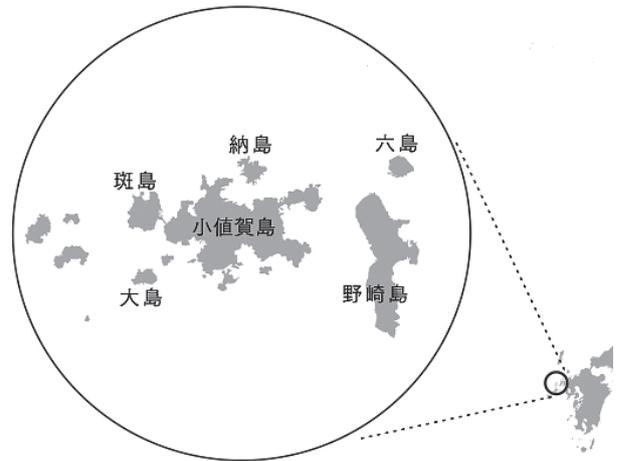


図1：小値賀町の離島配置（小値賀町 HP より）

は、単によその土地に嫁いで経験するものとは、一味違うように思える。

野崎と小値賀のつくりかたは違うところがある。笛吹（小値賀島の中心集落）、本土（小値賀島のこと）はちがう。じゃあ、ここはどういう作り方をしているんだろうと興味があるんです。よその家庭はどんな？違う作り方、調味料の使い方から。食に関する興味がすごくあったものですから（笑）。

② I ターン者として小値賀島の生活文化を観て

博多屋さんはおぢかアイランドツーリズム協会⁹⁾の正規スタッフ募集を契機に、中部地方から移住して5年になる。もともとまちづくりや観光に関心のある博多屋さんだったが、「かーちゃんの会」にかかわりはじめたのは、島の男性と結婚してからのことである。

ここで、腰を据えて生きていくのなら、島の料理とか自分も勉強したいなど。でも移住者として誰に料理を聞けばいいのかわからない。ご近所さんは郷土料理に興味がないとか、みな昼間は忙しいとか、タイミングがわからないとか、外から来た人は地元の料理を教えてもらえる機会がない。でも会に入ればやりながら学べる。

島の料理を学びたい思いが博多屋さんと会の出会いの出発だったものの、実際には、『かーちゃんの会』以外のところで会っても話せる人が増えた。私には頼れるお母さんが増えた。自分の居場所というかと、博多屋さんは島の人との出会いや自分の島での居場所が生まれたことに、一番の意味を見出している。

③ 「しばつけ団子づくり」の会が可視化した、島の食文化の現在

博多屋さんの移住者としての「目」は、博多屋さんの発案をうけて「かーちゃんの会」の事業として実施した、「しばつけ団子づくり」（2020年2月実施）で、本領を発揮する。

しばつけ団子とは、あん入り団子を島で採れた葉で挟んで蒸した島のおやつだが、生地やあんこのつくり方などで、家庭ごとの味があるという¹⁰⁾。

自分が勉強したいし、食べるのも好きだし。「かーちゃんの会」としてやることで、島の人にアピールできるし、今後の世代交代を考えると若い人がもっと関わるといいよね、ということもある。

博多屋さんにはそう違和感のない発案・行動だったが、浦さんはずいぶん驚いたという。

私からしたら、くるはずがないよね！と。しばつけ団子してもくるわけない、どこでもやってるし、と思っていたんです。味噌づくりもこなかったし。ふたをあけたら23人もきて！それこそ60代後半の人¹¹⁾からいたので、びっくりしたんです。食べたことあるけど自分で作ったことがないとか、自己流でつくっているけどこれで本当にいいんだろうとか、固くなってしまいうけどみなどうしているんだろうとか。自分がつくってみて疑問に思っている。かーちゃんの会がつくっている団子を私もつくってみたいな、と参加される方がいました。

同じ移住者とはいえ、小値賀島の暮らしが長く、かつ食を手作りすることがあたりまえの浦さんには、しばつけ団子はあまりに身近で、島のどの家庭でも難なく手づくりしているものと認識されていた。しかしすでに、伝承としての食文化は崩れかけ、あたりまえだからこそ聞けない状況が地域に広がっていたわけである。浦さんは、しばつけ団子をつくる会の実現を通して、小値賀の豊かな食文化の危機を、はっき



浦さん手製のしばつけ団子（筆者撮影）

り認識することになった。

博多屋さんは、そうした状況を明確に理解していたわけではないだろう。だが、しばつけ団子づくりの企画を思いついたのもまた、いざ作ろうとするときの、島にとっての身近さをめぐる、博多屋さん独自の分析的思考があった。

いろいろな料理がある中で、一番誰の家にもある、小麦粉と塩と砂糖。あんこも作ればいいけど売っているし、葉っぱも小値賀にある。一度習えばだれでも家で作れる気軽さ。おやつだし、お昼からつくって3時にたべられれば。いずれはお昼ご飯づくりできたらいいけど、気軽に1時間半でできるプログラムとしては団子が参加しやすい。しばつけ団子にも興味があった。

浦さんを中心に島の女性たちによって築かれてきた活動に、島に新しく根付こうとする博多屋さんの目線が加わったことで、また実際にしばつけ団子の会のような活動を実現し参加してきた島の多様な人々の声を直接聞くことで、「かーちゃんの会」の目は、島の食文化の日常の再発見へと、歩みだすことになったわけである。

(3) 授業で出会う子どもたちを通して、家庭と地域の現在を知る

①「かーちゃんの会」と小中高一貫教育

「かーちゃんの会」は、島の小中高一貫教育全体に、地域としてかかわっている代表的な存在でもある。関与の全体像は以下の通りである。

【学校の授業を通した、子どもたちとのかかわり】

- * 小3と中3合同のアジかまぼこづくり（6月／総合学習の一環）
- * 小6と中2と高3それぞれに、年1回の料理教室（アジ料理）
- * 高2,3年生の特産品開発グループによる海岸の自生植物「ハマゴウ」を使ったクッキーづくりへのアドバイザー（R元年度）

「アジかまぼこづくり」は、小3・中3の合同による総合学習のひとつのプログラムである。事前学習は毎年創意工夫されており、家庭でのインタビューやネットや本での情報収集を経て、小学生は紙芝居（H25, 26, 28, 29, 30）・アジかまぼこづくり新聞（H26）・アジかまぼこ絵本（H27）などの作成にとりくむ。H27からは栄養教諭の話聞くことも加わった。

こうした活動を経て迎える当日、まず小学生がかまぼこの作り方を発表したあと、かーちゃんの会がアジのさばき方の話をし、中学生が実際に自らの手でアジを3枚におろしたあと、中学生を主に小学生も一緒にアジかまぼこづくりの工程に入っていく。できあがったら一緒に給食を食べてお礼状を書くまでの流れが構成されている¹²⁾。

一方、料理教室は、小3のアジかまぼこづくりで一度アジを扱った子どもたちの経験の段階もふまえ、アジ料理を中心に行われる。浦さんは、小値賀の子なら皆、アジなら自分でさばいて料理できるというところまでもっていきたい、との思いで携わっているという。さらに中・高の料理教室では、斑島の漁師が大きなぶりの解体をみせ¹³⁾、中高生は刺身の切り方を体験する。これに、季節に応じて、地元食材のみえんどうの豆ごはんを炊いたり、旬の野菜をそえて、食膳が組み立てられている。

②子どもたちの様子が「見えてきた」

かーちゃんの会メンバーは、これらの活動を通して、子どもの様子を継続的に見つめてきた。

最近、刻むことができない子がいるんです。もうやっぱりね、家庭の手伝いをしていない子がほとんどです。私たちはもう見えてきてですね。ああ、中学校になっても、キャベツの千切りもできない。

切れるようにしたいよね、ここで、年1回でもいいからきちんとしてあげたいな、と。子どもの頭の片隅のどこかでもいいから、こんなことしていたよね、と入っていれば、自分がするとき、ああ、あんな感じだったと思いたしてできるんじゃないか。都会の子とちょっとぐらいは違うという。そういう希望もあるんです。

浦さんたちにとってそれが「見えてきた」と思えるのは、小値賀にあっても、いまや普通に地域に暮らすだけでは、子どもたちの様子が今や見えないという実感があるためだ。

本当に食はずっとついていくもの。それを大事にしてほしいのだけど、今、子どもの現場も見えなくなっている。何を食べているとか。昔は地域の交流があったし、よその家に入り込んでいった。用事で行って、こんなもの食べてるんだな、とか。

食文化を気にしてきた浦さんたちは、子どもたちの朝食の様子、孤食の様子、夕食の様子などを漏れ聞きながらも、それぞれは各家庭の事情のなかにあるだけに、外からふみこむこともできない。「見えなさ」ゆえに、料理教室で会う子どもたちの様子が、一層気になってくるのだろう。

料理教室を行うなかで、きれいに完食するんです。家で食べてるのかな…。親と料理を通してのつながりも、持ててはいないんじゃないか。台所に立つこと、ないだろうな。では、彼らはどんな家庭をもつだろう。今はチンすればごはんさえ炊かなくていい。ごはんは自分で炊けるようにとか、みそ汁ぐらいは作れる状態に持って行ってほしい。

親も子も忙しいのはわかる。でも生きるには食しかない。心も体も元気で生きてほしいという願いがあるもんですから…。私にしたら郷土料理教室で学校を回れるというのは、とても大事なこと。料理教室をみて、それを親に話す機会というのもね、ほしいなと¹⁴⁾。

③子どもの様子を島の構造的な問題として

浦さんたちは、子どもたちをとりまく親たちへ伝えたいことも思い浮かべながらも、家庭において食文化が継承されない理由は、親の責任ではなく、島の構造的な問題ととらえている。魚料理を例にとれば、町民向けに魚をさばいてくれるところがない。魚の切り身がパックで売られるのがあたりまえの都会では考えられない状況下に、今や都会とそう変わらないライフスタイルをもつ若い世帯もおかれているわけである。最近移住してきた博多屋さんには、この食生活を支える環境の問題やそれを支える島独自の目線が、一層クリアにみえているようである。

あまり家で魚がでてこないという子もいます。お母さんが忙しくてさばかないとか。結局肉料理が楽だから、お肉が多いとか。子どもによっては、普段家庭料理で食べていないと、そもそも手伝うところにもいかない。やっぱりお母さん世代に、もうすこし身近になるといいよねという話はしています。

そもそも小値賀は魚屋さんがないので。買うなら漁協。スーパーで切り身も売っていない。だから、(魚を)もらったとき、忙しくて仕事で疲れて余力のない、さばけないお母さんだと…。スーパーはアジとかそういう普通の魚はない。内臓も鱗も出したものはない。小値賀の共働きで大変な中で、魚をさばくところまではいかない環境はある。魚屋があつたらいいなという意見もあるくらいなので。昔はあつたらしいですね。(中略)小値賀はどうしても、魚をさばける人目線。(さばいて、血や内臓をだしても大丈夫な)家の裏に、水道がある人目線。

島内に水産加工場はあるが、残念ながら出荷は島外向け、島内の一般町民が買うお店にはまわってこない。しかもまだ働き手の募集が簡単ではなく、加工場がなかなか回っていないという¹⁵⁾。

かーちゃんの会のメンバーにとって、料理教室を通して子ども・家庭の現実にむきあっていくことは、子どもやその家族の食文化の現在のみならず、それらを支える社会インフラ・環境の問題まで含めて問題をとらえなおし、認識を新たにしていくことだったのでないか。いいかえれば、小値賀の小中高連携に

おいてとりくまれてきた地域と学校との連携は、子どもたちの学びの場として展開されることはもちろんだが、地域の大人が子どもたちの現在と向き合い、子どもたちの現在に課題意識を抱くことを通して、島の未来への思いや地域づくり全般においてなすべきことの自覚をも育む学びの場になりつつあるようにも思われる。

4 地域学習にとっての媒介的存在

以上、小値賀町の食育推進組織「かーちゃんの会」の、地域での「しばつけ団子づくり」と、小中高一貫教育に関与して行う料理教室の様子を通して、かかわる女性たちがそれぞれの日常意識をこえて、島の地域社会と人々の様子の現実を見出していく様子を見てきた。

先に本稿は目指す地域へのアプローチとして、「多数のローカルなもの」が地域内の緊張関係をのりこえながら、ローカルイメージを再創造し続ける自律的なプロセスを描き出すこと、それを支える環境の成熟に目を向けることをあげた。本稿の「かーちゃんの会」の描写はそれになうものだったのだろうか。

「かーちゃんの会」の二人をとりあげ描いた本稿の方法は、一見、地域活性化のモデルとなる優良事例・人物を描き出す、川端らが批判する既存の方法とかわらないと思われるかもしれない。しかし本稿はこの二人を、優良事例のリーダーとしてではなく、周囲とのかかわりの中で、自らと自らの周囲の日常に埋もれたまなざしを、顕在化された「多数のローカルなもの」へと移行させる、媒介的存在として位置づけた。

小値賀の食文化に関心を持ち、学び活動し続けてきた浦さんは、他島出身であることを背景に、小値賀島の食文化を新鮮なまなざしで学び取っていったが、少なくとも同世代の島の女性たちは、自分と同程度の食文化は維持していると思っていた。それはすでに幻想であったわけだが、「違い」ある実態はなかなか彼女の視野に入ることがなかった。文化の支え手たちの状況をめぐる多様性が進行するとともに、それがサイレントなまま浮かび上がらない、地域の変化があったわけである。

そうした彼女たちに、実態が可視化する1つのきっかけをもたらしたのは、Iターン者・博多屋さんの異なる目であり、多様な人の興味をよび参加を促す場（しばつけ団子づくりの会）の設定であった。こうした場が成立することにより、「本当は自信がない、他の人の作り方を学びたかった」といった、サイレントな声が地域で共有されることを可能にしたといえる。この場を実現した「かーちゃんの会」が小値賀町の非合併自治体としての歩みにおいて生まれたことは、この場が地域動態と共にあることも暗示している。

また、異なる目や思いが表現される学びの場が、地域においても学校においても実現したのは、机上の文字やことばを介してのみの学びの場ではなく、どちらも食をつくるという、手間をかける暮らしの文化を介したものとして行われた意味もあったのではないだろうか。そこには、かかわる人々が思いやことばや行動を互いに交し合うとともに、ふと思いをもらす「間」を与えるコミュニケーションが存在すると思われるためである。

ただしそもそも小値賀町は、こうしたコミュニケーションにおいて豊かな土地であった。ひとたびきっかけさえあれば、「間」ある交流へのハードルは低い地域性だともいえる。

たとえば、北松西高校における授業「地域探究」の生成に3年間かけて中心的一かかわった浦田裕美教諭は、自らの暮らしのなかの地域とのかかわりについて、以下のように語っていた。

行事がいっぱい、あるんですね。バレーボール大会とかバドミントン大会とか、夜7時半スタートとか。平日に。そこであつ、こんな若い人がいるんだとか、知るんです。自分が運動好きなので、職員チームをつくったりして、それは積極的にいきます。そうして人と出会ったり。あとは保護者ですねえ。保護者＝地域の方ですし。そこでもつながる。あとは、単純に、住んでいる地域の方が、話し

かけてくれる。たとえば徒歩1分でいけるスーパーに歩いていたら、おばちゃんがいる。この地域の人だとおもってあいさつしたら、「野菜持ってくる？」とかいわれるんです(笑)。クリーニング屋さんに行ったら「ひらすの切り身が余っているから、もっていく？」とか。意味わからないんですけど、くれるんです。どうお返ししていいか、わからない。私は何もないよ、だけど。おいしかったです。どう料理したらいいんですか、とかさらに話をしていたり。私も人と話すのは好きなのですが、そうでなくても話しかけてくれる小値賀のよさがある。自然につきあいが増えていきました。

彼女の自然体の積極性が、場面場面でかかわりを深めていく方向に功を奏していることは、もとよりである。だがやはりここで注目しておきたいのは、たとえ顔見知りでなくても、いったんかかわりが生まれれば、野菜や魚を気兼ねなくさしだすようなホスピタリティをごく自然に発揮し、外から来た人にとっても自然に地域での付き合いが増えていくような、小値賀の人々のかかわりの文化である。

近隣の島の出身ながら、赴任1年目は「なんて小さなところにきたのか」と思ったという浦田教諭が、のちには生徒たちを地域の人につなげたいと思うようになっていった背景には、自分自身が一歩踏み出し、地域の豊かなかかわりの中で暮らすようになり、地域の人を知ったことがあったのだという¹⁶⁾。教師自身が日常の中に人と人の小さなかかわりがふんだんに埋め込まれた地域に支えられて、島における生活主体に近づいていく姿をここにみることができよう。授業「地域探究」の開始を直接の契機としながらも、教諭が地域によって、地域学習への媒介的存在へと育てられていったともいえるだろう。

なお、小値賀町に関して有名な話に、「ピープル・トゥ・ピープル国際学生大使(PTP)」としてアメリカから高校生約180名が2泊3日で島を訪れ、その後のアンケートで、全世界のコース中「満足度No.1」に選ばれた(2007年、2008年の2年連続)という出来事がある。何もないといわれる島であったが、アメリカの高校生たちには、島の風景や体験、民泊でのあたたかな交流が印象に残ったわけである。この島の日常のありようは、海外の若者たちの高評価のみならず、第1次調査でうかびあがった、北松西高校の生徒たちの島への深い愛情を育む、基本的な土壌でもあるだろう。

こうした「間」を与える地域の暮らしにおけるコミュニケーションを支えとしながら、媒介的役割を果たす存在によって、自らと自らの周囲の日常に埋もれたまなざしや声が、顕在化された「多数のローカルなもの」へと移行する。それはもとより、顕在化された地域内葛藤とのむきあい方とは異なる静かなる対峙のプロセスであろう。

島の高校生たちは、小中高一貫教育のなかで、島を生きる人との出会いを通して、自分たちが向き合っていきたい島の現実に出会う学びを獲得しつつある。議会提案活動などを通して、その姿をオンライン上や広報を通して目にする島民もいることだろう。彼らとかかわる「かーちゃんの会」の二人も、自分たちの活動はもとより、子ども若者との交流にも刺激を受けて、さらに学びをすすめているように見える。どちらもそれは数年前の、「間」に満ちた豊かなコミュニケーションの中で暮らしを営みつつも、島に戻るとは逃げとでもいうような価値意識をもつ大人像や、そうした大人の価値観を無意識にうけとめる若者像とは、明らかに異なっている。

しかし小中高生たちと深くはかかわらない島の大人一般に、彼らがたちあげつつある多様な声がどこまで届いているのか、一方学校にかかわる地域の人々の思いが学校側にどこまで共有されているのかについては、いまだ疑問が残る部分がある。「多数のローカルなもの」を顕在化させ、共有していくための媒介的役割を果たす存在が地域の各所に生まれ、学校内外における地域学習が持続的に展開されていくのは、まだこれからの課題でもあるだろう。

また、本稿は「かーちゃんの会」の女性たちの学びに焦点をあてることで、彼女たちを地域一学校にまたがる地域学習にとっての媒介的存在として描き出すことを試みたが、一方で生徒たちにかーちゃんの会

やその料理教室をめぐる直接調査していないため、彼女たちの活動・学びの高校生への影響はあくまで推測にとどまっている。彼女たちの学びの、学校の地域学習における「位置」については、今回の共同研究各論との関連も含め、さらなる検討が必要だろう。

【注】

- 1) 拙稿「小値賀町にみる、地域課題としての学校」九州大学大学院人間環境学研究院社会教育研究室『社会教育研究紀要第2号』2016年、参照。
- 2) 拙稿「『地域学習』再考—社会教育における共同の視点から—」『教育学研究』第87巻第4号、2020年12月、P93。
- 3) 恒吉紀寿「〈九州〉における地域構造の分析枠組み—市町村の構造的理解とリージョンとしての九州—九州大学大学院人間環境学研究院社会教育研究室『社会教育研究紀要第2号』2016年、参照。
- 4) 川端浩平・安藤丈将編『サイレント・マジョリティとは誰か』ナカニシヤ出版、2018年、P5。
- 5) むろん、その多様性は平たんなものとしてとらえられるわけではない。たとえば轡田による、サイレント・マジョリティの鈍感さ、一方である特定のマイノリティへの想像力は開かれている場合がある＝想像力の「開口部」の存在の指摘など、興味深い。(轡田竜蔵「サイレント・マジョリティを思考すること」前掲川端・安藤編著、P35)
- 6) 「ふるさとの味・かーちゃんの味」つたえよー会レシピ集編集委員会編『おぢかんものレシピ本』2018年1月。
- 7) 永田敬三さん(当時産業振興課)インタビュー、2020.3.6。なお永田さんは「『ふるさとの味・かーちゃんの味』つたえよー会」という一風変わったネーミングについて、末広がりのイメージ、また生きる原点としての食およびふるさとのイメージを、かーちゃんということばに託したとも語っている。
- 8) 以下、浦さん・博多屋さんの発言ともに、2020年3月6日のグループインタビューに基づく。
- 9) おぢかアイランドツーリズム協会は、2006年の小値賀町観光協会、ながさき・島の学校、おぢかアイランドツーリズム推進協議会の3団体の統合ののち、2007年に特定非営利法人格を取得した団体である。自然体験、民泊、古民家事業など、観光の対外的な窓口となり総合的にプロデュースを担っている。
- 10) なお現在、「しばつけ団子づくり体験」は、一人90分2000円で体験できる、おぢかアイランドツーリズム協会のツアー&アクティビティともなっている。
- 11) 当日の参加者は、若い世代から幅広い世代にわたっていた。「60代後半から」という浦さんの発言は、自分とほぼ同じ世代の人でも団子の作り方が伝わっていないという驚きの表現である。
- 12) 平成25年～令和元年度『小値賀地区小中高一貫教育研究収録』より。なおここで、アジカまぼこづくりは、小学生と中学生の合同学習であるため人間関係形成能力、そして海の資源を大切に作る心情を身につける一貫と位置づけられている。本論のみる、かーちゃんの会が育んできた子どもたちへの願い(地域の側からの教育的意図)とは、若干違いもあるようにも思われる。
- 13) ぶりの解体を担当する中村光洋さんも、ただ解体を見せるだけではなく、子どもたちに思いを伝えることを大事にしている。「ああいよっちゃんあと、一つでも思い出してくれれば。親の話ばかり聞くより、先輩の話を後ろで聞いて、人間も見る目をな」という。背後には自分自身が中卒で斑島を出ることなく漁師として働くなかで、人の話をよく聞き、人を見る目を学んできたという自身の経験に基づく実感がある。(中村光洋さんインタビュー、2020.3.4)
- 14) 一方で、北松西高校での郷土料理教室を報じた以前の町報記事には、「本来ならば、自分たちが、魚のさばき方や郷土料理のつくり方を教えてやらなければならないのですが、近頃では、各家庭でつくる機会が減っており、今回の企画に大変感謝しています」との保護者の感想も掲載されていた。(『おぢか新聞』2005年3月号)
- 15) 小値賀町では、町行政主導のもと、2016年の農産物加工場に続き、2017年から水産加工場が稼働している。小値賀町では農産物・水産物・畜産や林業含め物産担当を担い手公社に一元化し、町からの出向職員を中心に、総合的にマネジメントしているのが特徴である。(産業振興課田川昌義さんインタビュー、2020.3.5より)。博多屋さんからは期待も含めて加工場の現在に厳しい目がむけられているが、加工場としては発足してそれほど年月がたっておらず、まだ体制整備が軌道にのりつつあるただなかにあるとも思われる。
- 16) 浦田裕美教諭インタビュー、2020.2.19。